No.2212　　２０２２年１２月１８日発行
日本キリスト教団　吾妻教会月報

あがつま

『わたしたちは見えるものではなく
見えないものに目を注ぎます。
見えるものは過ぎ去りますが、
見えないものは永遠に存続するからです』
（コリントの信徒への手紙Ⅱ　４章１８節）

♪賛美歌を歌おう㊺
『もろびとこぞりて』
（讃美歌54年版－112番）

毎年12月になれば、どこかで必ず耳にする定番のクリスマスの賛美歌です。同じメロディで歌われる英語賛美歌『Joy to the World!』（世界よ喜べ）も、テレビＣＭなどでよく使われていて馴染みがありますが、『もろびとこぞりて』は『Joy to the World!』ではなく、フィリップ・ドッドリッジ（1702-1751）作詞の『Hark, the glad sound!』（聞け、喜びの音）の訳詞となっています。

ドッドリッジはイギリスのロンドンに非国教会派の家に生まれます。彼は８歳で母親と、13歳で父親と死別し、孤児となりました。

13歳で孤児となったドッドリッジに、ある人が大学進学のための資金援助を申し出ましたが、彼はこれを断りました。なぜなら国教会への改宗が条件だったからです。そしてドッドリッジは非国教徒が運営する牧師養成学校で学び、会衆派教会の牧師となりました。同じく会衆派教会の牧師であり、英語賛美歌の父とも呼ばれるアイザック・ウォッツ（1674-1748）とも親しくしていたようです。このウォッツによって作詞されたのが『Joy to the World!』です。この賛美歌詩が〝アンテオケ〟と呼ばれる旋律と組み合わされ、わたしたちもよく知る定番のクリスマスの賛美歌となりました。

一方で、ドッドリッジの　⇘

』『Hark, the glad sound!』も〝ブリストル〟と呼ばれる旋律など、幾つかの旋律と組み合わされて歌われていました。この２つの賛美歌は、宣教師たちによって日本に伝えられ、どちらも1903年出版の『讃美歌』に掲載されました。ウォッツの詞は『民みな喜べ』、ドッドリッジの詞は『もろびとこぞりて』とそれぞれに訳されたのですが、なぜか旋律の組み合わせが入れ代わって、『民みな喜べ』が〝ブリストル〟と、『もろびとこぞりて』が〝アンテオケ〟と組み合わされていたのです。このため日本では、〝アンテオケ〟が『もろびとこぞりて』の専用曲のように認知されていき、あまり歌われなかった『民みな喜べ』は1931年出版の『讃美歌』には掲載されませんでした。

ただし、ウォッツの歌詞が日本で全く歌われなくなったわけではなく、現在では日本聖公会の聖歌集に『世界よ喜べ』として〝ブリストル〟との組み合わせで掲載されている他、日本福音連盟から発行されている『聖歌』には、『民みな喜べ』（中田羽後訳）として〝アンテオケ〟と組み合わせて用いられています。

『もろびとこぞりて』は、明治期に翻訳されたこともあって、現代の日本語としては難解な言葉遣いがされています。特に、２節の歌い出し「悪魔のひとやを」の〝ひとや〟を「一夜」や「一矢」などと誤って解釈されることもありますが、正しくは「人牢」と書き、悪魔の牢獄を打ち破るという意味ですので、気をつけて歌いたい所です

ドッドリッジの『もろびとこぞりて』を〝アンテオケ〟のメロディに合わせて歌うのは、日本のカトリック教会や聖公会の聖歌集にも見られます。これは欧米のキリスト教会にはあまり見られない、日本独自の伝統と言えるかも知れません。

（稲垣）